

## 六 視線

時々感じろじりじりと焼かれるようなこれは。何だと思ふ事も最近ではなくなっていた。その送る主を知っているからだ。

いつだったかも知れなけれど、きつともう一年近くにはなっている。この暑苦しいような熱っぽいような、それでいて言葉にも出来ないくらいに愛しげに送られる、それは――視線。入学して間もなくの頃から何やら視線を感じろと思つて、暫くは素知らぬ振りでも過ごしてきただけれど、気が付けば半年程その視線に晒されていて、流石に気になりちらりと目をやれば、ばちと音がする程はつきりと目が合い驚いた。

目が合った瞬間真っ赤になつて俯いたのは、隣のクラスにいる何かと煩い男だったからだ。やたらと話し声をはきはきしていて、無駄に声がかい。さらに言うなら頭にぐる事にかと張り合つてくるので、すっかり自分たちは「マミ」として周りから思われていたのだ。

黙つていればいい男なのに、馬鹿だなア、と政宗は思つていた。顔立ちやマミは悪くないのに、あの変な喋り方と無駄に暑苦しい性格と、馬鹿みたいに政宗殿と言ひ寄つてくるせいで、彼は風変わり者扱いされてた。

けれど、それでも、こうして一年近くも何かと張り合い競い合い、時にはただ他愛のない会話をする事も増えて、思えば彼は誠実だし真面目だし些か行き過ぎた感はあるけれど、今時の

同じ年の連中に比べれば純粋で、そして、何やら非常に政宗に気を許しているような、もつと言えは懐いているような、そんな素振りを見せてくるのだ。そんな風に接してこられて、嫌な気持ちにはせず、どちらかと言えは政宗は幸村を気に入っていたし、あの日真っ赤になつて俯いた幸村を思えば、驚きはしたもののそれを咎める気にはならなかったのだ。

そうして、この一年すつとすつとあの視線に見続けられて来て。

ああ、もしかしてこれほど、思い始めて。いやでもあの熱を孕んだ視線に追い続けられていれば意識するなと言われてもしてしまふ。日に日に挑むような態度は形を潜め、今は寧ろ親友に近いくらいの関係で、彼の心の変化が手に取るように分かつてしまふ。そしてそれに付き合う自分の気持ちの変化にも。今までのように挑み挑まれる関係よりも、今こうして穏やかに肩寄せ合う程近くて笑い合う事の幸福感。

すつかり自分も同じじゃねえかと、今更気付いた政宗は隣で普段通りの幸村に、じつと視線を送つてみた。

気付くと、願うように。

## 十五 痕跡

政宗は起き抜けのぼうっとする頭で上半身を起こして、それはそれは盛大にぼうっとしていった。ぼんやりどころの騒ぎではない。人生で最大級にぼうっとしていろのだ。

昨夜の幸村から齎された全ての事に。嘗てない程政宗の思考を、気持ちをも、体を、めまぐるしくしかも色鮮やかに変えてしまったそれに、世界までが変わったように、目覚めてすぐから重怠い体を眉を擻めながらも起こして、上半身には鮮やかすぎる程鮮やかな痕跡を露に――。

初めて出会った時から今まで出会ったどの連中とも違うと思って、それは向こうも同じだったように、お互いに気になりつつもまさかそんなと思いついて、それでもやはり自分の気持ちに嘘も吐けず、思い切ってアンタに惚れてるんだと告げれば、先を越されたと真っ赤になって悔しがられて、某もお慕いしておりますとやたらと真剣に申し出られて、二人で頬染めあったあの日から。何度となくそう言う雰囲気にはなったし、順を追うように触れるだけのマッパから、深く息をするのもままならないようなマッパをして、そうすればお互いに簡単に反応し合っただけで、次第に Escalate して触り合ったり、時には唸るように歯を食い縛る幸村が政宗自身をこれ以上は致さぬゆえと懇願にも近い様子で口を食んだりして。そうして、お互いにとぅとう歯止め効かないところまで行き着き、こうして夜を超えてしまったのだ。もう駄目でマッパ、耐えられぬ、一生かけて大切にしますゆえと半泣きで迫られて、破く勢いで着ている物を剥ぎ

取られ、悪態も吐けない程懇切丁寧に体を開かれて、幸村の言葉に返事をするのも倦ならぬままに、掻き抱かれて。そうして、今まで知り得なかつた心地よさと快感と深い感動に見舞われて、こうしてぼうっとしてしまっているのだ。初めて他人と肌を合わせたくせに、やたらと丁寧だったせいなのか、優しくされたからなのか、痛みだとか苦しきだとかは最初の頃だけで、あとは自分でも嫌になる程気持ちよくて、俺はこんなに無節操だったのかと凹むくらいに感じ入ってしまったのだ。好きな相手と想いが通じて肌を寄せ合う事の素晴らしさに、一気に心の中が満たされて――。

政宗が起きるまでずっとその腕の中に囲っていた幸村が、起きられるかと言いながら上半身を起こしてくれたあとに風呂の用意をしてくると言い出て行って、それから。それから、こうしてぼうっとしていろのだ。余りにも世界は一気に変わってしまったから。この肌に残る幸村の痕跡に負けないくらいに色鮮やかに――！

髪を梳く気配に気付いて目を開ければ、そこには幸せそうな笑顔と例えられる物を、その顔一面に貼り付けた幸村がいて、僅かに驚いたものの、いて当然の存在なので、何してんだよといつも通りに声をかければ、余りにも可愛らしい寝顔だったので、再び微笑まれて政宗は俄に頬に血が上るのを感じる。

二年生に進級してからも習慣化していた屋上での暇潰しは続いていて、根も葉もあるようではないような胡散臭い噂に振り回された生徒たちが近付かないのをいい事に、政宗は基本的に屋上を独り占めしていた。聞いていても退屈でつまらない授業など。。。するのが当然とでも言う様な感じでほぼ毎日余程天気が悪くない限りはここでぼんやりと空など眺めたり眠気に任せて情眼を貪ったりしていたのだ。そこへ、怖いもの知らずと言うか、好奇心旺盛の新入生と思しき集団がやって来て、己の睡眠時間を邪魔したので、ひと睨みして追い払えば、彼らは彼らなりに政宗の噂を知っていたようで、そそくさと退散しその場は再び政宗の求める静寂を取り戻したのだけだと。翌日からが大変で、うたた寝していれば何を思ったのか一人の一年坊主が恐れ知らずにも政宗の寝顔を覗き込んでほほうと感極まったような溜め息を零すようになったのだ。それは大変鬱陶しいのでその度に殴り飛ばしていたのだが、打たれ強いのか馬鹿なのか（結局どちらもなかった）、性懲りもなく通い詰めてくるので、流石に生傷の絶えない一

年坊主に辟易としていれば、今日は殴らないので？ 等と聞かれてうんざりしてもう飽きたと答えば、そうですが、それなら一緒に昼飯でも食いませぬかと本当に阿呆みたいな笑顔で言われて、日差しのせいだけじゃない程それが眩しくて、めまいを起こしそうになったのだ。それ以来その一年坊主は何かと声をかけてくるし、一緒に昼飯まで食べる間柄になってしまい、挙げ句の果てに勉強まで見てやる始末で、俺は一体どうなっちゃったんだと思うのに、あの綺麗な笑顔で笑いかけて、いつの間にも似た症状がこの一年相手だけに起ころのだと、したくもない自覚までさせられて。眠ければどうぞ寝て下されと促されるままにその肩に頭まで預けて。それで、知ったのだ。コイツという温かいような擦ったような、それでいて少し落ち着かないような。政宗殿と呼ばれて笑いかけられると無性に心臓がぎゅっと引き攣れるような。

そして、それは今でも続いてゐる恋の病だという事を。